

新刊紹介



阿部芳郎著

『ウィと言えない「ゴーン改革」』
坂ノ下 征稔

日産自動車村山工場の跡地に立ってみると、南北ちょうど2キロメートル、東西約800メートルの広大な原野である。

村山村（現武蔵村山市）に生まれ、「砂川山」と呼ばれた武蔵野の雑木林と一面の麦畑を切り開き開始された村山工場建設を見、工業高校を卒業してその工場で働き続けてきた私にとって、原野に戻った跡地を見るのは特別の感慨がある。あそこがプレス工場、ここが車体工場、あのへんが組立工場、ここが自分の働いてきた機械工場のあったところ、と明確に指さすことができる。

その工場で組合分裂や集団暴力・差別とたたかい、労災事故で殺された何人もの青年たちを悼み赤旗を先頭に抗議の構内デモを繰り広げたことなどが昨日のように思い出される。

村山工場閉鎖によって、福島県いわき工場、栃木工場、追浜工場、座間工場、遠く九州工場へと配転になり、定年までの長期単身赴任を余儀なくされた仲間、転居していった仲間、心ならずも退職せざるを得なかった仲間たちのことを思うと心が痛む。私自身も定年までの最後の時期を毎日往復4時間かけて座間工場に通勤することとなった。

そして売り上げ急減で店を閉めた工場周辺の商店、仕事の減少と単価切り下げで廃業に追い込まれたり、経営悪化に陥った関連企業をみると「日産リバイバルプラン」がいかに身勝手なものであったか明白である。

カルロス・ゴーン氏は「日産リバイバルプラン」とそれに続く「日産180計画」によるいわゆるV字回復を『成果』にして、フランス、ルノー社の会長に凱旋就任するという。マスコミや財界はこぞってゴ-

ン氏を「改革者」とほめたたえ、小泉首相は勲章まで授与している。

だが真実はどうか。

多くの従業員を退職に追い込み、関連メーカーに犠牲を強要し、結果として購買力を減少させ国内販売は少しも増加していない。このような経営が長続きするはずもない。

三菱自動車のクレーム隠しやJ R西日本の利益優先の経営による重大事故、さらには大手橋梁メーカーによる長年の談合が告発されるなど、大企業の社会的責任の欠如が次々と明らかになっている。

こうしたなかで、本書は地を這うような取材で「ゴーン改革」がもたらしている実態を告発し「ルールある資本主義」の重要性を教えている。

(2005年3月・本の泉社刊・1400円)

(さかのした まさとし・

前JMIU日産自動車支部委員長)

大江 洸・三上 満・小林 洋二著

『憲法—人生をかけて守るもの』

小川 薫

大先輩である大江さん、三上さん、小林さんたち歴代全労連議長が書いたこの本は、私たち青年層には難しいものかと思いましたが、読み始めると引き込まれるように一気に読み上げることができました。今の青年が体験できなかったことがいろいろ書かれていて、憲法があったから、紆余曲折を辿りながらも労働運動の前進を勝ちとってきたことを感じました。多くの人や組織と団結して国民的な大きな流れをつくることと革新自治体をつくり世の中のために声をあげることの必要性について改めて考えることができました。

今、自民党は07年を目途に「憲法改悪」をすすめています。これと一体となった「教育基本法の改悪法案」と憲法改悪を準備する「国民投票法案」の通常国会への提案を画して、国民世論に挑戦する「戦争する国づくり」を強引に進めています。

しかし、国民世論は「憲法を生かせ」「憲法9条を守れ」が多数を占め、戦争する国づくりと憲法改悪に反対する強い意志を持っています。